

浜松城跡 43 次調査の成果

～ 二の丸御殿の基礎構造が明らかに ～

令和 3 年（2021）9 月 15 日

市民部文化財課

浜松城公園長期整備構想に関わり、令和元年から旧元城小学校跡地（浜松市中区元城町）で実施している浜松城跡の発掘調査において、二の丸御殿とみられる建物基礎を発見し、その詳細な構造が明らかになりました。

確認した遺構は、柱を支える礎石や礎石の据え付け穴、雨落ち溝（軒先の雨水受け溝）など。礎石と礎石の中心間の距離は約 2 m であり、建物は 6 尺 5 寸（1.97m：京間）を基準に設計されていました。当地域において、京間を基準に用いることは、比較的古い時期に多くみられる特徴であり、今回検出した建物遺構は、江戸時代の二の丸に建てられていた御殿の基礎にあたると思われられます。

また、礎石が東西に並ぶ北側には、瓦で側面を囲った溝が総延長 4 m ほど確認できました。これは、軒先の雨水を受ける「雨落ち溝」とみられることから、今回検出した御殿基礎は、北側に開けた部分にあたることも判明しました。

【発掘調査の概要】

調査期間 令和 3 年度調査（令和 3 年 6 月から令和 4 年 1 月（予定））

調査機関 浜松市文化財課

調査目的 浜松城公園長期整備構想に関わる確認調査

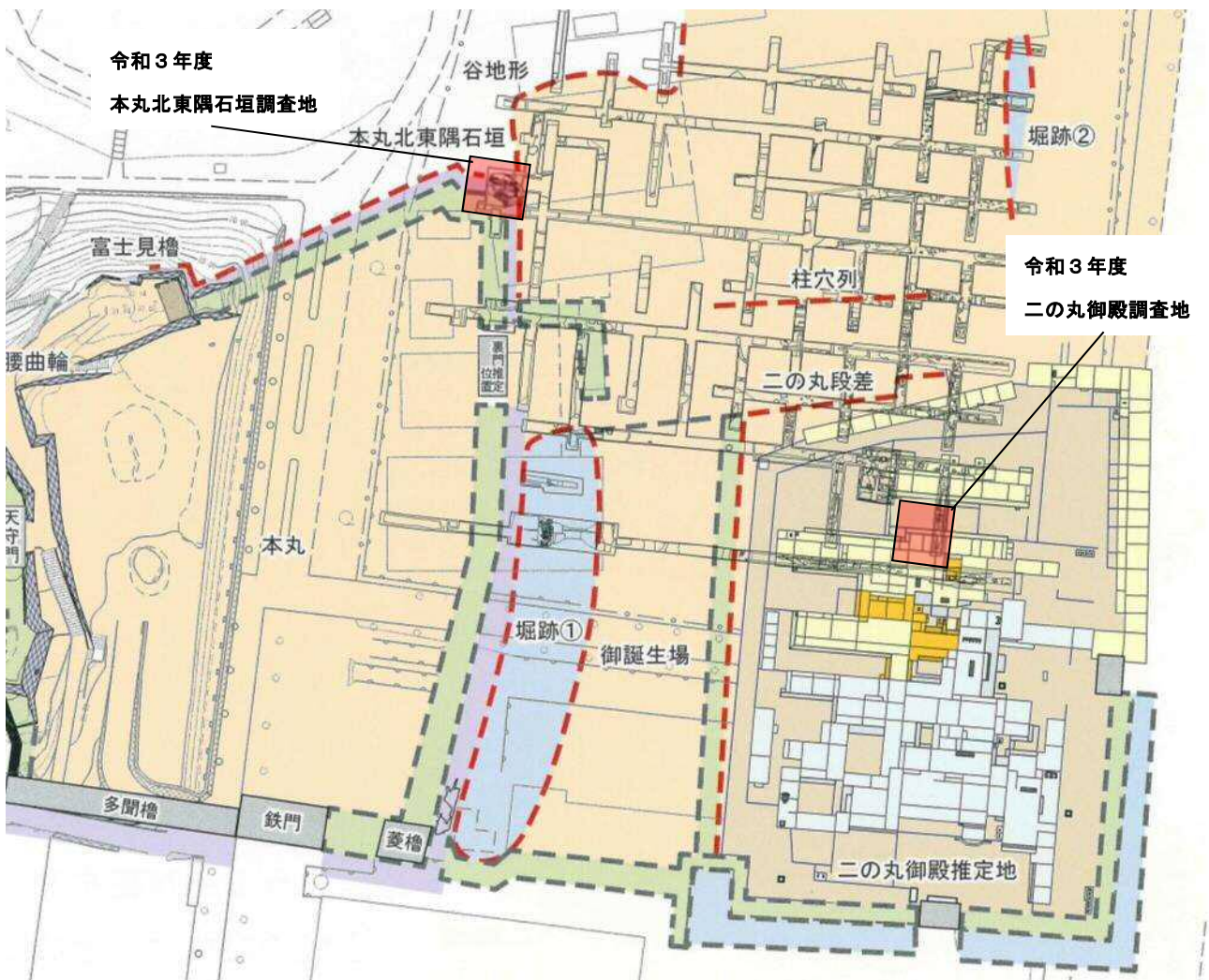
調査面積 1,180 m²

浜松城

徳川家康よって元亀元年（1570）に築城され、天正 18 年（1590）、豊臣秀吉の重臣・堀尾吉晴により大規模な石垣を備える城郭へと整備された。江戸時代には徳川譜代大名が城主を勤め、二の丸御殿の建設や三の丸の整備が進められた。明治 5 年（1872）、城内の土地や建物が民間に払い下げられた。現在は天守曲輪と本丸の一部、西端城曲輪が市の史跡に指定されている。

浜松城二の丸御殿

江戸時代の浜松城における中心的な建物。二の丸御殿の平面形や部屋の配置は、江戸時代に描かれた絵図からうかがい知ることができる。政務を執り仕切る政治空間「表御殿」と、藩主の生活空間である「奥御殿」で構成される。明治時代初頭の廃城時まで現存していた

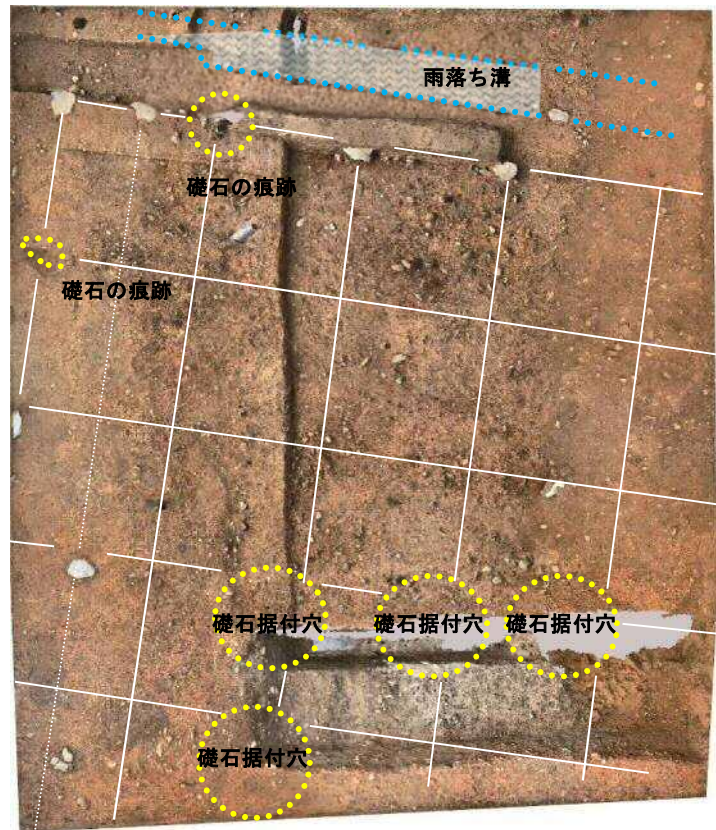


令和元年・2年の調査成果と令和3年度の調査地（御殿等の位置は推定）

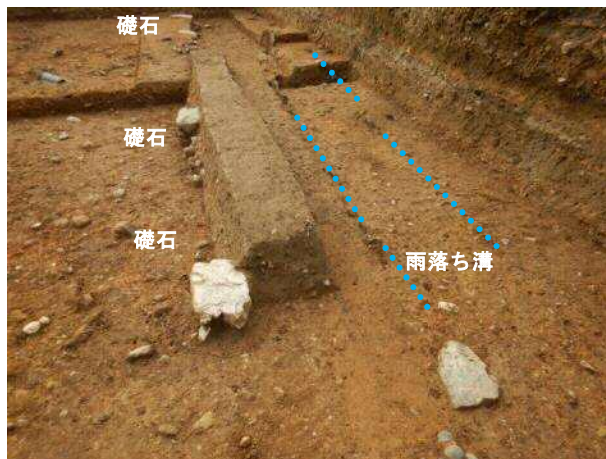
二の丸の建物基礎と

雨落ち溝を確認

二の丸内で建物基礎（礎石）6石と礎石を据えるために掘られた穴（礎石据付穴）や礎石の痕跡を6箇所以上確認した。また、礎石に沿って雨落ち溝が敷設されていることが判明した。列をなした礎石と雨落ち溝を確認できたことは、発掘調査成果と二の丸御殿を描いた絵図と照合する際に有力な手掛かりになる。

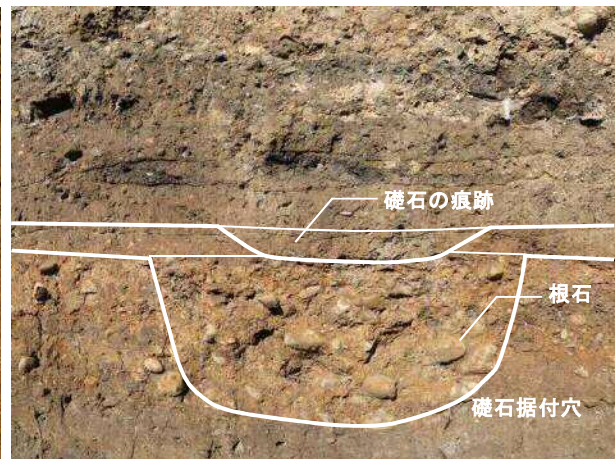


検出した二の丸御殿の
基礎配置と雨落ち溝



礎石

発見した礎石の中心間の距離は約2mである。御殿は、1間を六尺五寸（1.97m）とする京間が採用された建物と判明した。礎石には領域内で産出するチャートや片岩に加え、花崗岩の使用が認められる。礎石に用いられた石材の大きさは、長さ30～35cm、厚さ20cm程度とみられる。

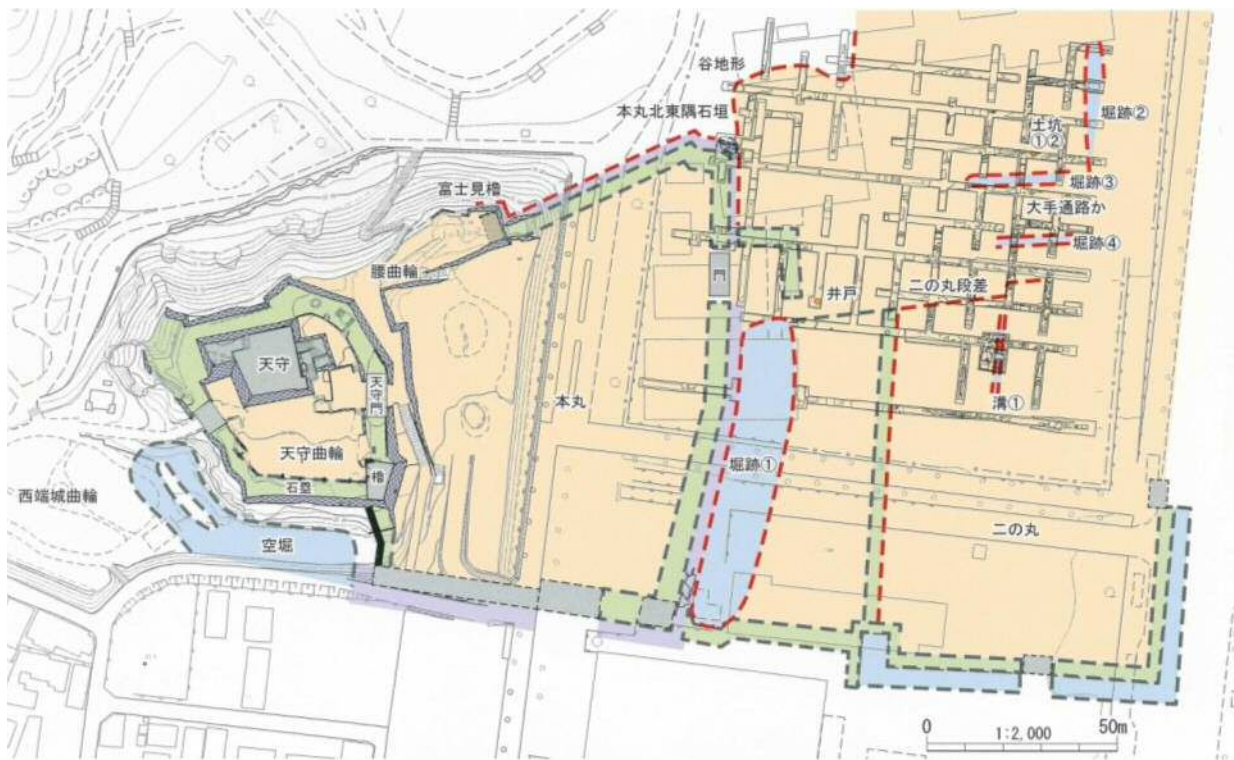


礎石据付穴

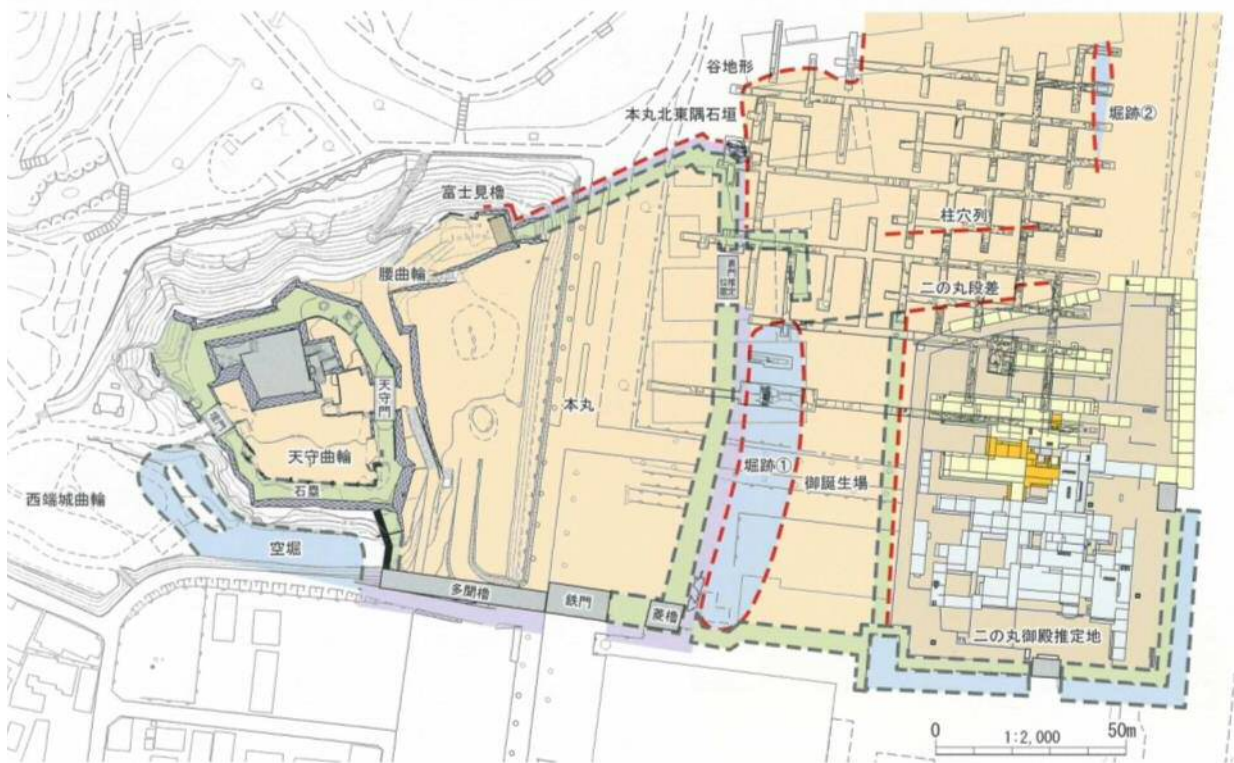
整地した地盤に、直径0.6～0.8m、深さ0.6mほどの礎石据付穴を掘り、根石と呼ばれる礫が詰められている。礎石が残存するものは根石の上に礎石が据え置かれる。礎石が取り外されたものでも、礎石据付穴や抜き取られた礎石の痕跡から礎石の配置を推定することができる。

調査成果と展望

発掘調査により天守曲輪から二の丸にかけての浜松城の中核部の構造と変遷が明らかになってきた。とくに安土桃山時代の浜松城から江戸時代の浜松城へと変化する過程で、二の丸御殿建設地の造成や一部の堀の埋め立てなど大規模な土木工事が行われたことが明らかになった。今後、発掘調査と絵図などの調査を踏まえ、総合的に浜松城の構造や変遷を究明する必要がある。



安土桃山時代（堀尾氏在城期）を中心とした時代の遺構（一部、戦国時代を含む）



江戸時代の遺構 ※御殿などの建物の位置は推定